様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ００１２５

研究課題名（和文）ペラギウス派神学思想の相互影響・発達史的観点による伝承史的・教会政治史的総合研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study of the Mutual Influence & the Historical Perspective of the Development of Pelagian Theological Thought

研究代表者
山田　望（YAMADA, Nozomu）

南山大学・総合政策学部・教授

研究者番号：７０２７９９６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：ペラギウス派神学は、東方神学におけるアンティオキア伝承の人間観を受け継いでいる。しかし神化思想の大枠においては、主流派たるオリゲネスからの影響も見られ（特にパウロ書簡注解）、神学実践では更に異なるバシレイオスからの影響も存在する。これは、相互影響・発達史的観点からすれば決して矛盾などではなく、オリゲネスが異端の嫌疑を受けて以降、ペラギウス派は、それに代わる東方思想としてアンティオキア伝承やバシレイオスらを範とべく思想的発展をきたしたと考えられる。他方、彼らを排斥したアウグスティヌス陣営にも、オリゲネスやペラギウス派への反発により、自由意志の否定や原罪論の提唱へと思想的先鋭化を来すようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来、全く別個の神学論争として見なされていたオリゲネス論争、ドナトゥス論争、ペラギウス論争、そしてネストリオス論争といった古代教会史上の神学論争間の思想史的関連にとって、対立する陣営間の人脈関係を元に、その間に働いていた相互影響・発達史的観点に基づく新たな方法論の導入がきわめて有効に働いた。これらは本来別個の神学論争だったのではなく、各々の陣営がお互いに影響し合いながら自らの神学思想をより先鋭化されたものへと発展させていったことが明らかとなった。また、男性中心の論争の背後で、女性信徒による孤児救済の慈善活動が行われていたとの新たな事実も見出され、思想史上の空白部分を埋める学術的成果が得られた。

研究成果の概要（英文）：Pelagian theology inherits the Antiochian tradition's view of man in Eastern theology. However, in the general framework of the theological thought, there is also influence from the mainstream school Origen and, in theological practice, from the even more different Basil. From the perspective of mutual influence and developmental history, this is not a contradiction in terms, and after Origen was accused of heresy, the Pelagians developed their thought as an alternative to Eastern thought, taking Antiochian tradition and Basil and others as their models. On the other hand, the Augustinian camp, which had rejected them, became more radical in its ideology, denying free will and advocating the theory of Original Sin, due to its opposition to Origen and the Pelagians. Finally, the new methodology of the influence and the historical perspective of the development of Pelagian theological thought, which was adopted for this research, has clearly contributed a lot for the Pelagian study.

研究分野：思想史

キーワード：ペラギウス論争　ペラギウス　ペラギウス派　アウグスティヌス　ドナトゥス派　異端　東方神学　影響史

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景
本研究の元々の着想、すなわち西方教会最悪の異端と見なされてきたペラギウス派の神学思想は、本来、東方神学の諸特徴を西方側で繰り返していただけに過ぎなかったのではないか、との発想自体は、本申請者の博士論文ならびに平成 9 年にそれを基に出版された拙著『キリストの模範』（教文館）にまで遡る。その後の研究により、ペラギウスが、アクイレイアのクロマティウスから Exemplum Christi（キリストの模範）を始めとする神学的基本概念を受け継ぎ、オリゲネス主義論争を通してエヴァグリオスのアスケーシス論を継承したこと、さらには、キリストの生と死を巡って、ペラギウス派はアウグスティヌスの恩恵論とは全く異なる神学的枠組みを東方神学、とりわけアンティオケイア伝承から継承していたこと、また、ペラギウス派第２世代の弟子たち、特にエクラヌムのユリアヌスによる性欲解釈、女性論は、ペラギウス派がアウグスティヌスとは全く異なった神人論の枠組みを継承していたことを明らかにしてきた。以上の研究は、ペラギウス派に関わる個別論争、個別テーマに基づく研究であったのに対し、今回の科研では、これら個別テーマ全てを統合し、時系列的に連続する諸論争全体を通してペラギウス派神学思想が相互影響史的に発展・構築されてきたことを含め、系統的・網羅的・包括的に扱うものであり、今回の着想や重要課題は、30 年間のペラギウス派研究を継続し国内・国際学会の場で著名な研究者達との真摯かつ真剣な議論によりもたらされ浮上してきたものである。

２．研究の目的
報告者は、西洋思想史において西方教会最大の異端思想として知られるペラギウス派の神学思想について、この思想は、東方神学のアンティオケイア伝承と密接な繋がりを有し、すなわち、東方神学の正統的系譜と同等の思想内容を保持し、いわゆる異端思想などとは無縁であったとの仮説を従来から主張しており、本研究は、この仮説の最終的な証明を第一の目的とする。加えて、それではなぜアウグスティヌスを始めとする北アフリカ陣営により異端として激しく糾弾され、西方教会において排斥されるに至ったのか、また東方神学内の異なる伝承からの影響を併存させているのはなぜかとの重要課題を、相互影響史的・発達史的観点をも導入することにより、実証的に解明することを第二の目的とする。さらに、ペラギウス派や東方側クリュソストモスのパトロン貴族たちが行っていた救貧・慈善活動における西方と東方の連携性・類似性、また、アウグスティヌス陣営が時を違えて激しく対立したドナトゥス派とペラギウス派との繋がりを示す痕跡史料を、伝承史的・文献学的史料のみならず、考古学的史料データからも推察・再構成することで、より立体的・総合的にペラギウス派神学思想の位置づけと排斥のメカニズムを解明するという学際的総合研究を目ざす。

３．研究の方法
以上の、１）ペラギウス派神学思想が東方神学の観点からは異端思想ではないとすれば、なぜ西方側、とりわけアウグスティヌス陣営からあれほど激しく糾弾、排斥される事態に至ったのか、２）東方神学の中でも、アンティオケイア伝承を基本思想に据えながらも、異なる神学伝承からの影響が確認されるのはなぜかといった重要課題に対し、本研究では、ペラギウス派の神学思想を、伝承史的、教会政治史的検証により解明される基本伝承を根幹に据えつつも、その神学思想全体については、相互影響史的、発達史的観点の導入により、その都度新たな思想要素を取り込みながら展開されていった動的な思想的流れとして解明することを目的とした。つまり、本研究の具体的作業手順としては、まず、文献学的・伝承史的に思想内容そのものの分析・検証を行い（特にテオドロスやクリュソストモスとの思想的連携）、続いて、ペラギウスやその弟子のカエレスティウス、ユリアヌスらが、アンティオケイア伝承の思想家たちとどのような実質上の繋がりがあったのか、また、如何なる歴史的経緯や政治的圧力により排斥にまで追い込まれる結果となったのか教会政治史的考察を行った。さらに、相互影響史・発達史的観点から、時系列的に連続する異なる複数の論争を経ることにより、ペラギウス派神学思想がいかなる展開・発達・先鋭化を来していったかを解明した。とりわけ、従来、全く別個の神学論争であると位置付けられてきたドナトゥス派論争とペラギウス論争との間にいかなる関係が存していたのかについて、あらたな相互影響史・発達史的方法を適用することで解明するよう試みた。また、ローマ史における東方神学からの影響を受けたペラギウス派の本拠地と目される考古学史跡の有力な一つとして、ローマ市内ラテラーノ地区サン・ジョバンニ病院の地下から発見された孤児院と思しき遺跡の存在することが明らかとなり、その思想史的位置づけの可能性も検討することができた。

４．研究成果
　ペラギウスやその弟子であったペラギウス派の神学は、基本的には、東方神学の中でもアンティオキア伝承の人間観を受け継いでいることは明らかである。しかし神化思想の大枠においては、アンティオキア伝承とは全く異なった、アレキサンドリア派のオリゲネスからの影響も見られ（特にパウロ書簡注解）、さらに禁欲的神学実践では、両者とも異なるカッパドキア教父の代表者であったバシレイオスからの影響も存在する。相矛盾するかに見えるこれらの特徴は、しか

し、相互影響・発達史的観点からすれば決して矛盾などではなく、当時、ローマ貴族の多くが、オリゲネス神学の影響を受けてはいたものの、オリゲネスが異端の嫌疑を受けて以降、ペラギウス派は、それに代わる東方思想としてアンティオキア伝承やバシレイオスらを範とすべく思想的発展をきたさざるを得なかったと考えられる。他方、彼らを排斥したアウグスティヌス陣営にも、論敵であったオリゲネス主義者やペラギウス派への反発により、当初はそれほど過激な立場ではなかったものが、論争が長引き激化するにしたがって、自由意志の否定や人間本性の全的堕落を説く原罪論の提唱へと思想的先鋭化を来すようになったと考えられる。

こうして、従来、全く別個の神学論争と見なされていたオリゲネス主義論争、ドナトゥス派論争、ペラギウス論争、そしてネストリオス派論争といった古代教会史上の神学論争間の思想史的関連にとって、対立する陣営間の人脈関係を元に、その間に働いていた相互影響・発達史的観点に基づく新たな方法論の導入がきわめて有効に働いたことは間違いない。これらの論争は、本来から別個の独立した神学論争だったわけではなく、各々の陣営がお互いに影響し合いながら自らの神学思想をより先鋭化されたものへと発展させていく中で、一層過激な神学思想へと次第に変化を遂げていったことが明らかとなった。

また、さらには、これら男性中心の神学論争の背後で、女性信徒による孤児救済の慈善活動が一貫して行われ続けており、この新たな事実・知見も興味深い発見となり、男性中心の神学論争史の中にいわば埋もれる形で、これら女性たちによる救貧慈善活動の存在が解明できたことは、思想史上の空白部分を埋める学術的成果として評価に値する。具体的には、ローマ市内ラテラーノ地区サン・ジョバンニ病院地下から発掘出土した孤児院と目される救貧施設が、ペラギウス派やそのパトロンであった大メラーニアとの何らかの関係を有するものだったのではないかと推察される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 山田　望	４．巻 第28号
２．論文標題 サン・ジョヴァンニ病院地下救貧慈善施設の 歴史学的・教父学的考察―ローマ貴族ヴァレリウス家を巡る人脈と神学思想史的背景を中心に―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 『アカデミア』人文・自然科学編	６．最初と最後の頁 in print
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山田望	４．巻 第26号
２．論文標題 ペラギウス論争への相互影響・発達史的研究方法の適用妥当性ードナトゥス派論争との関係考察における史的・方法論的課題を中心にー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 南山大学紀要『アカデミア』人文・自然科学編	６．最初と最後の頁 37-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Nozomu Yamada	４．巻 Vol.128
２．論文標題 Pelagians’, Chrysostom’s and Augustine’s Different Views on Pain of Childbirth as Revealed through their Counsel to Women	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Studia Patristica	６．最初と最後の頁 300-312
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nozomu Yamada	４．巻 16
２．論文標題 Pelagius’ View of Ideal Christian Women in his Letters Critical Perspectives of Recent Pelagian Studies Comparing Chrysostom’s View in his Letter to Olympias	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Scrinium, Journal of Patrology and Critical Hagiography	６．最初と最後の頁 67-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 山田　望
2．発表標題 シンポジウム趣旨説明
3．学会等名 キリスト教史学会第73回大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 Nozomu Yamada
2．発表標題 Exploring the Relationship Between the Donates' and Pelagian Controversies: Validity of a New Mutually Influencing, Historically Developing Theological Approach
3．学会等名 Asia-Pacific Early Christian Studies Society 13th Annual Conference（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 Nozomu Yamada
2．発表標題 Exploring the Relationship Between the Donatist’ and Pelagian Controversies: Validity of a New Mutually Influencing, Historically Developing Theological Approach
3．学会等名 Asia-Pacific Early Christian Studies Society 13th Annual Conference（国際学会）
4．発表年 2023年

1．発表者名 山田　望
2．発表標題 「陣痛は罰」？「女性は死の源」？ーペラギウス派、クリュソストモス、アウグスティヌスによる陣痛解釈の相違ー（四半世紀のペラギウス研究における発表者の挫折体験と成果から：秘蔵写真の紹介も併せて）
3．学会等名 東方ギリシア教父と女性、連続公開研究会、第三回
4．発表年 2021年

１．発表者名 Nozomu Yamada
２．発表標題 Pelagians’ and Chrysostom’s Similar Ascetic Counsel to Christian Women
３．学会等名 The Eighteenth International Patristics Conference in Oxford（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 Nozomu Yamada	４．発行年 2019年
２．出版社 Kyoyusha	５．総ページ数 225
３．書名 Contribution of Women to Con-viviality, In/Ad Spiration to Convivials, 'Change of Views on Ideal Christian Woman in Late Antiquity: From Early Eastern Traditions to the Pelagian Controversy'.	

１．著者名 Nozomu Yamada	４．発行年 2022年
２．出版社 Pandora Press	５．総ページ数 240
３．書名 Intercessory Prayer and the Communion of Saints - Mennonite and Catholic Perspectives	

１．著者名 Nozomu Yamada	４．発行年 2021年
２．出版社 Peeters Publishers	５．総ページ数 438
３．書名 Studia Patristica, Vol. CXXVIII, pp. 295-308, "Pelagian's, Chrysostom's and Augustine's Different Views on Pain of Childbirth as Revealed through their Counsel to Women".	

１．著者名 山田　望	４．発行年 2022年
２．出版社 教友社	５．総ページ数 209
３．書名 『古代キリスト教の女性ーその霊的伝承と多様性』所収、pp.116-177,「女性の尊厳と自由意志ーペラギウス派、クリュソストモス、アウグスティヌスによる女性観・陣痛観の相違」	

１．著者名 山田　望	４．発行年 2020年
２．出版社 知泉書館	５．総ページ数 343
３．書名 『「原罪論」の形成と展開――キリスト教思想における人間観』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関